

	原文	読み	書き替え・読み替え
あ	相知れる人相交われる人	あいしれるひとあいまじわれるひと	霊様を知る人相交われる人
	倏忽事の如く	あからめさすことのごとく	いともはかなく
	惜しき	あたらしき	悼ましきイタマシキ
	(子を) 挙げ給いぬ	あげたまいぬ	儲けモウケ(育てあげ) 給いぬ
	挙げ儲け	あげもうけ	育て上げ
	朝開き漕ぎ行く船の消えて影なき事の如く	あさびらきこぎゆくふねのきえてかげなきことのごとく	夜明けに漕ぎ出す船の沖に消え行く姿の如く
	厚く身に行いつつ	あつくみにおこないつつ	暮らしの中に踏み行いつつ
	篤しれまして	あつしれまして	(病も) 差し迫る様となりて
	篤しれませば	あつしれませば	差し迫る様となれば
	あな	あな	思えば(原文は「ああ」の意)
	雨雲の空搔曇る心地	あまぐものそらかきくもるここち	雨雲の空の如く暗き心持ち
	天津菅曾の	あまつすがその	カット(原文は「天の大幣の」の意)
	殯室のまま乍らも暫しも長く	あらしのままながらもしばしもながく	柩の側に寄り添いひと時も長く
	新霊を	あらみたまを	出直し給いし霊様を
	在りし世の事々	ありしよのことごと	この世におわしましたる時の事々
	生れ出で	あれいで	生れ出でウマレイデ
	哀れ	あわれ	悼ましきも・思えば(原文は「あめ」の意)
	哀れ悼ましきかも	あわれいたましきかも	思えばまことに悼ましきかな(原文は「ああ悼ましいことだ」の意)
	云うも更なり	いうもさらなり	言わずもがな
	家門高く広く立興し給い	いえかどたかくひろくおこしたまい	家の栄えに真心を尽くし給い
	厳しく	いかしく	厳かにオゴソカニ
	息衝き乱るる心を	いきつきみだるるころを	息遣いも乱れる心を
	生の涯と	いきのかぎり	命の限り
	生の涯を	いきのかぎりを	生涯を
	功績	いさおし	御功績ゴコウセキ
	厳しく	いずしく	厳かにオゴソカニ
	厳の	いずの	尊き
	五十日の間は	いそかのほどは	五十日の間はゴジュウニチノアイダハ
	勤しみ仕え(励み)	いそしみつかえ(はげみ)	努め励み
	労つき給わん由もがなと	いたつきたまわんよしもがなと	骨を折り給わん・精を出し給わん日のまた訪れる事を
	働き給いて	いそはきたまいて	勤め励み給いて
	いと惜しき御棺を障る事なく恙む事なく	いとあたらしきみひつぎをさわることなくつつむことなく	御亡骸ミナキガラを納めし柩ヒツギを障りなく恙なく
	いと懇ろに	いとねんごろに	心遣いもまこと細やかに・骨身惜しむこと更になく・真心の限りを込めて
	今し	いまし	この
	汝主・刀自	いましぬし・とじ	霊様
	汝霊はし	いましみたまはし	霊様には
	今ゆ後	いまゆのち	今より後は
	今を始めと	いまをはじめと	今日よりキョウヨリ
	妹背の伸いと麗しく	いもせのなかいとうるわしく	夫婦メオトの伸もいと睦まじく
	弥栄え	いやさかえ	益々の栄え
	敬い(て)	いやまい(て)	ウヤマイ(テ)
	弥向榮に守り恵み幸え給えと	いやむくさかにまもりめぐみさきわえたまえと	一段と(益々・いよいよ) 勢いに満ちて立ち栄えしめたまえと
	儀式・式事・典儀	いやわざ	斎儀
	(学校に) 入りまして	いりまして	ハイリマシテ
	齋員	いわいびと	齋員サイイン
	齋い定めて	いわいさだめて	定めて・清め定めて
	齋い奉り鎮め奉る	いわいまつりしずめまつる	鎮め奉る
	言巻くも忌忌しき	いわまくもゆゆしき	そのお名前を口にすれば悲しさもいや増す

	云わん術(方)為ん術知らに	いわんすべ(かた)せんすべしらに	この心地をば表わす言葉もなく(なき程)
	親族家族	うからやから	家人イエビトたち・シンゾクカゾク
	後も安く前も穏に	うしろもやすくまえもおだいに	心置きなく
	諾ない給いて	うずないたまいて	受け取り給いて
	諾ない聞こし食して	うずないきこしめして	受け取り聞き届け給いて
	内外	うちと	ウチソト
	打払う麻のさやぎのさや さやに払い給い	うちはらうぬさのさやぎのさやさや にはらいたまい	打払う幣ヌサの禊ミソギの音色のまに まに払い給い
	現世の涯と	うつしよのかぎり	今世コンセ(イ)の終わり
	顕世の限りやありけむ	うつしよのかぎりやありけむ	御命オイノチの限りやありけむ
	現世の永き別れを	うつしよのながきわかれを	今世の別れを
	現世の定め(慣い)	うつしよのさだめ(ならい)	この世の定め
	現世の慣いと	うつしよのならいと	この世の定めとて
	現世の人の心の理にぞある	うつしよのひとのこころのことわり にぞある	無理からぬ心のようにぞある
	空蟬(現身)の	うつせみ(うつしみ)の	カット
	旨らに	うまらに	よしなに
	子孫の	うみのこの	子々孫々に至るまで
	宇良賀し奉らくと	うらがしまつらくと	慰め奉らくと
	美わしく	うるわしく	恙なく
	老の身を養いまして	おいのみをやしないまして	末永く健やかならんと身を養いまして
	置き足らわして	おきたらわして	供え奉りて
	奥床	おくどこ	所
	長に	おさに	会長に
	落つる事なく	おつることなく	抜け落ちる事なく
	小床	おどこ	所
	奥津城	おくつき	御墓所ミハカドコロ・墓所ボショ
	男	おのこ	オトコ
	思い設けぬ	おもいまけぬ	オモイモウケヌ・思いがけぬ
	各々	おのおのも	それぞれが
	女(子)	おみな(ご)	オンナ
	拝み奉りて	おろがみまつりて	伏し拝み奉りて・伏し拝みつつ
	拝み奉らくを	おろばみまつらくを	伏し拝む様を
	拝み奉る状を	おろがみまつるさまを	伏し拝む様を
	女とある道の事々	おんなとあるみちのことごと	婦人の心得を
か	関ずらいし	かかずらいし	関わりし
	鼻据え	かきすえ	担ぎ据え
	かきくるる	かきくるる	悲しみに沈む
	限りしあれば	かぎりしあれば	命に限りある上は
	かくてあらねば	かくてあらねば	かくある上は
	斯くてあるべきならねば	かくてあるべきならねば	かくなる上は
	掛け巻も恐き親神	かけまくもかしこきおやがみ	我らが親におわします 天理王命(原文は「言葉にするのも恐れ多い」の意)
	恐み恐みも	かしこみかしこみも	謹み謹みて ツツシミ ツツシミテ
	数々に	かずかずに	全て・残す所なく
	仮初の御病重りて	かりそめのみやまいおもりて	ふとしたる病 思いの外ゆゆしくなりて
	故れ	かれ	かくなる訳にて・かくなる上から
	聞き食し諾い給い	きこしめしうずないたまい	聞き届け受け取り給い
	聞き食せと	きこしめせと	聞き届け給えと
	種々に	くさぐさに	様々と
	種々の物を	くさぐさのものを	様々なる物を
	奇しき縁のまにまに	くしきえにしにまにまに	不思議なる縁によりて(のまにまに)
	奇しき御量にしあれば	くしきみはかりにしあれば	深き思召しによるものなれば
	苦瀬を	くるせを	苦しみを
	父母に	かぞに	フボニ・チチハハニ・二親フタオヤに
	乞祈み奉りて	こいのみまつりて	願い祈り奉りて
	ここを以て	ここをもて	これにより・これゆえに
	去年の	こぞの	昨年の
	辞あげ称えて	ことあげたたえて	称えて

	悉に	ことごとくに	悉くコトゴトク
	理なれど	ことわりなれど	無理からぬ姿なれど
	臥し給い	こやしたまい	床に伏し給い
	今宵しも	こよいしも	今宵
	この程より	このほどより	先頃より
	この家の守護神と～	このやのまもりがみと～	《教理から考えて使わない》
	これの現世に	これのうつしよに	この世に・我らのこの世界に
さ	幸く	さきく	幸サチ多く
	先つ頃より	さきつころより	先の頃より
	更なり	さらなり	言わずもがな
	其が	しが	その
	曾母・そも	そも	そもそも
	然はあれど(も)	しかはあれど(も)	さりながら・されど
	敷き弘めて	しきひろめて	人に広めて
	静けく	しずけく	心静かに
	誅び	しぬび	シノビ
	知らに	しらに	知らず
	救う由もがなと	すくうよしもがなと	救う手立てはなきものかと
	為ん術なければ	せんすべなければ	為すすべもなければ
	その効だになく	そのしるしだになく	その甲斐なく
た	平らけく安らけく	たいらけくやすらけく	心穏やかにまた安らかに
	頼もしみ思いつつ	たのもしみおもいつつ	頼りとして心強く思いつつ
	誰かは驚き嘆かざらん	たれかはおどろきなげかざらん	驚き嘆かざる者更になし
	千々の一つを言挙げて	ちぢのひとつをことあげて	あらましを称え奉りて
	千代の	ちよの	永遠のトワノ
	仕え終え奉れるによりて	つかえおえまつれるによりて	執り行い終えぬるによりて
	仕え奉り終えぬるにより り・終えぬるをもて	つかえまつりおえぬるにより・おえ ぬるをもて	執り行い終えぬるによりて
	仕え奉らくと	つかえまつらくと	執り行わんと
	仕え奉らしめ給えと	つかえまつらしめたまえと	執り行わしめ給えと
	仕え奉らんとする	つかえまつらんとする	執り行わんとする
	仕え奉る	つかえまつる	執り行う・司るツカサドル
	告げ白さく	つげもうさく	別れの詞コトバを告げ白さく
	謹み嘆かいて	つつしみいやまいて	謹み敬いてツツシミウヤマイテ
	謹み敬いて	つつしみなげかいて	謹み嘆きつつ
	罪咎のあらんをば	つみとがのあらんをば	もし罪汚れケガレあらば
	露の玉串捧げ奉り	つゆのたまぐしささげまつり	玉串を捧げ奉りて
	露の玉串取々に	つゆのたまぐしとりどりに	玉串を手に・玉串を献じて
	照月の円満かに	てるつきのまどやかに	照る月の如く安らかに満ち足りて
	遠永に	とおながに	永久にトコシエニ
	刀自	〇〇とじ	〇〇様
な	直く	なおく	素直にて
	嘆かい(て)	なげかい(て)	嘆き(つつ)
	懐かしび	なつかしび	懐きナツキ
	主	〇〇ぬし	〇〇様
	式	のり	儀・儀式
は	(汝主・刀自)はし	はし	霊様には
	葬場に	はふりのにわに	野辺送りの場に
	葬後の御祭	はふりののちのみまつり	弔いの後ノチの御祭
	春風の長閑けく	はるかぜののどけく	春風の如くのどかに
	ひたと臥し給いしかば	ひたとこやしたまいしかば	にわかにならば床に伏し給いしかば
	人の力の得て及ぶべき	ひとのちからのえておよぶべき	人の力の及ぶべき事
	人の喜び世の助けと	ひとのよろこびよのたすけと	世のためまた人の喜びと
	一日も早く	ひとひもはやく	イチニチモハヤク
	一世の涯と	ひとよのはてと	今世の終わりと
	一世の終の	ひとよのはての	今世の終わりの
	一世の間に立て給い遺し 給える	ひとよのほどにたてたまいのこした まえる	遺し給える
	日を経るままに	ひをふるままに	(月)日が経つにつれ
ま	参来集える	まいきつどえる	参り集える

参(来)列なる	まい(き)つらなる	席を並べる
枕辺に棲這い(蹙い)脚辺に葡萄い	まくらべにしじまいあとへにはらばい	枕辺に寄り添い足元にひれ伏し
設け置き	まけおき	モウケオキ
任せられ給いて	まけられたまいて	任命され給いて・任せられ
坐せ奉り斎い奉る	ませまつりいわいまつる	鎮まり給う
真具に	まつぶさに	余す所なく
真名子と	まなこと	愛し子イトシゴと
忠実に雄雄しく	まめにおおしく	まめやかに(まめまめしく)一筋に
守り幸い恵み給えと	まもりさきわいめぐみたまえと	栄えるべく見守り給えと
御寿命の限りにや	みいのちのかぎりにや	与えられし御命オイノチの限りか
御酒御食海川野山の種々の物を	みきみけうみかわぬやまのくさぐさのものを	お神酒海山の幸を始め様々なる物を
御遺徳・御功	みいさおし	ゴイトク・遺されし勲イサオ
御教の事に労き給いてし	みおしえのことにいたずきたまいてし	人だすけの道に骨を折り給いし(精を出し給いし)
御心地常ならず	みこちつねならず	御心地優れず
御心足らいに	みこころたらいに	よしなに
御性	みさが	気立て・心根・ご性格
御姿	みすがた	オスガタ
霊はし	みたまはし	霊様には
御徳	みとく	オトク
御伴	みとも	オトモ
御量にや	みはかりにや	お計らいか
御葬場に	みはふりのにわに	野辺送りの場に
御葬の式	みはふりのわざ	弔いの儀・儀式・斎儀
御棺の前に	みひつぎのまえに	棺ヒツギの前に
見奉りては	みまつりては	目の当たりにすれば
御祭	みまつり	弔いの儀・野辺の送り
御祭の式	みまつりののり	弔いの儀・野辺送りの儀
御祭事に	みまつりわざに	弔いの儀を・野辺送りの儀を
身護らいつつも	みまもらいつつも	見守りつつも
見守らいも甲斐なく	みまもらいもかいなく	手当ても甲斐なく
御身やくさみ(病み)	みみやくさみ(やみ)	御身オンミを患い
御身養い坐して	みみやしないまして	御身オンミを養いまして
御病重りて	みやまいおもりて	患いし病 思いの外ゆゆしき様となりて
御齢は〇〇歳を	みよわいは〇〇さいを	御年オントシ〇〇歳を・齢ヨワイ〇〇を
嫡妻	むかいめ	妻
娶いて	めあいて	契りを結び
愛でのまにまに	めでのまにまに	慈しみのまにまに
申言	もうしごと	お声・お言葉
専ら	もはら	ひたすら・唯々タダダ
諸人	もろびと	もろもろの人
百千の憂きに耐え辛きを忍びて	ももちのうきにたえつらきをしのびて	幾多の苦労(憂いごと)に耐え辛き立場も忍びて
や 家内	やうち・やぬち	イエウチ・〇〇家
安けく	やすけく	安らかに
八十連綿五十樞八桑枝の如く	やそつづきいかしやくわえのごとく	未広がり
ややややに	ややややに	いよいよ
和しみ平ぎて	やわしみたいらぎて	和らぎ穏やかとなりて
由久理なき	ゆくりなき	思いがけぬ
ゆくりなくも	ゆくりなくも	思いがけず
斎場	ゆにわ	野辺送りの場・サイジョウ
吉事に凶事のいつぐ	よきことにまがことのいつぐ	善き事に災い事の続く
任され	よぎされ	任せられ
世の真人と	よのうまひとと	徳の高き人と
世の裨益	よのたすけ	世のため人のため
夜昼知らに	よるひるしらに	夜昼問わず・世を日に継いで

わ	私心なく万公平に	わたくしごころなくよろずおおらかに	私心も分け隔ての心もなく
	五十二歳	いそとせあまりふたつ	ゴジュウニサイ
	三人・四人	みたり・よたり	サンニン・ヨニン